

岩手県宮古市刈屋地区の林野火災跡地の カラマツ林で確認されたツチクラゲの子実体

1 はじめに

ツチクラゲ (*Rhizina undulata*) はつちくらげ病の病原菌で、たき火跡周辺や林野火災跡地でしばしば発生し、樹木の根元に感染して枯死を引き起こす。国内では主にアカマツ林やクロマツ林における集団枯損の原因となることが知られている。

佐藤ら (1974) は、ツチクラゲがカラマツを寄主としていることを報告している。一方で、カラマツ林におけるつちくらげ病の発生事例は、長野県や岩手県で報告されているが、その報告事例は限られている。その中で林野火災跡地での発生事例は少なく、林野火災跡地におけるカラマツへのつちくらげ病の影響については不明な点が多い。今回、林野火災跡地のカラマツ林でツチクラゲの子実体を確認したので、その状況について報告する。

2 材料と方法

令和6年4月20日に発生した宮古市刈屋地区等林野火災の跡地において、林野火災発生から約2年4ヵ月後の令和8年8月18日に調査を実施した。調査対象林分は標高310mの西向き斜面に位置する43年生のカラマツ林であり、部分的に集団枯損が認められた(図、写真1)。当該林分は北側にスギ林、東側の斜面下部にアカマツ林が隣接している。

調査はアカマツ林から15m以上離れ、スギ林の林縁から約15mの範囲内に位置するカラマツ36本を調査木とし、調査木の根元から半径2m以内の範囲におけるツチクラゲ子実体の有無を目視にて確認した。なお、調査木の内訳は生残木が13本、枯死木が23本であった。

3 結果

調査木のうち、根元周辺にツチクラゲ子実体を確認された調査木は5本だった。その内訳は生残木で2本、枯死木で3本だった。ツチクラゲ子実体は調査木の根元にまばらに発生し(写真2)、その多くは直径3~4cmだった。なお、ツチクラゲ子実体が見られた生残木1本では、葉の一部がやや黄変していた(写真3)。

4 考察

今回の調査では、カラマツ林でツチクラゲ子実体の発生が確認され、カラマツの一部は葉が黄変していた。黄変の原因が焼損によるものか、つちくらげ病によるものか判別できなかったが、林野火災後のカラマツ林においてもつちくらげ病が発生する可能性が考えられた。今後も林野火災跡地におけるつちくらげ病の発生状況を継続的に調査し、カラマツへの影響を把握していく予定である。

引用文献：佐藤邦彦・横沢良憲・庄司次男 (1974) マツ類の群状枯死を起こす「つちくらげ」病に関する研究. 林試研報268. 13-48.



図 対象林分位置

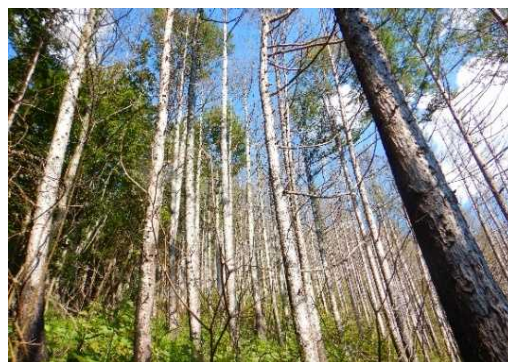


写真1 調査対象林分



写真2 カラマツ根元のツチクラゲ子実体

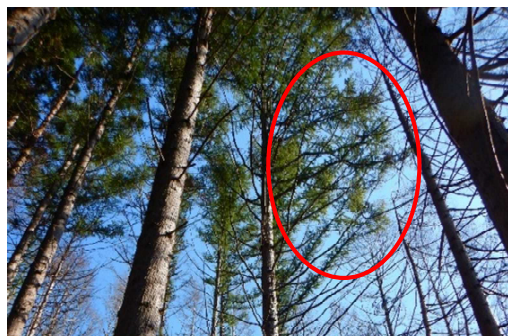


写真3 葉の一部黄変

(担当 研究部 主任専門研究員 皆川 拓)

連絡先

028-3623 岩手県紫波郡矢巾町大字煙山第3地割560番地11

岩手県林業技術センター

ホームページアドレス

TEL 019-697-1536

FAX 019-697-1410

<https://www.pref.iwate.jp/~hp1017/>